



(淡彩44×31cm)

口 縄 坂

え と 文

渡 辺 敬 介

坂が多いところである。大阪上町台地には七つの坂があるという。

「……口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たように思われた。風は木の梢にはげしく突っ掛つていた。」

織田作之助の『木の都』は学生である私と坂の古レコード店父子との心の交流を人情味豊かに描いていく。

「夕陽岡」から伝い石をたどる。やがて口縄坂。何度か通った。いつだってゴミゴミしていた。まして『時局に鑑み廃業仕候』と貼紙した名曲堂のあるはずもないが、それでもここは案外情緒が残っている。坂の途中地藏尊があって手を合わせる人が絶えない。口縄坂の名はそれが蛇の如く木々の間を縫うのに因む。九十段はあって見下ろせば結構高い。夕暮近く、付近は打って変わったガラガラしたネオン街。別の大阪が息づいていた。

(大学図書館職員)